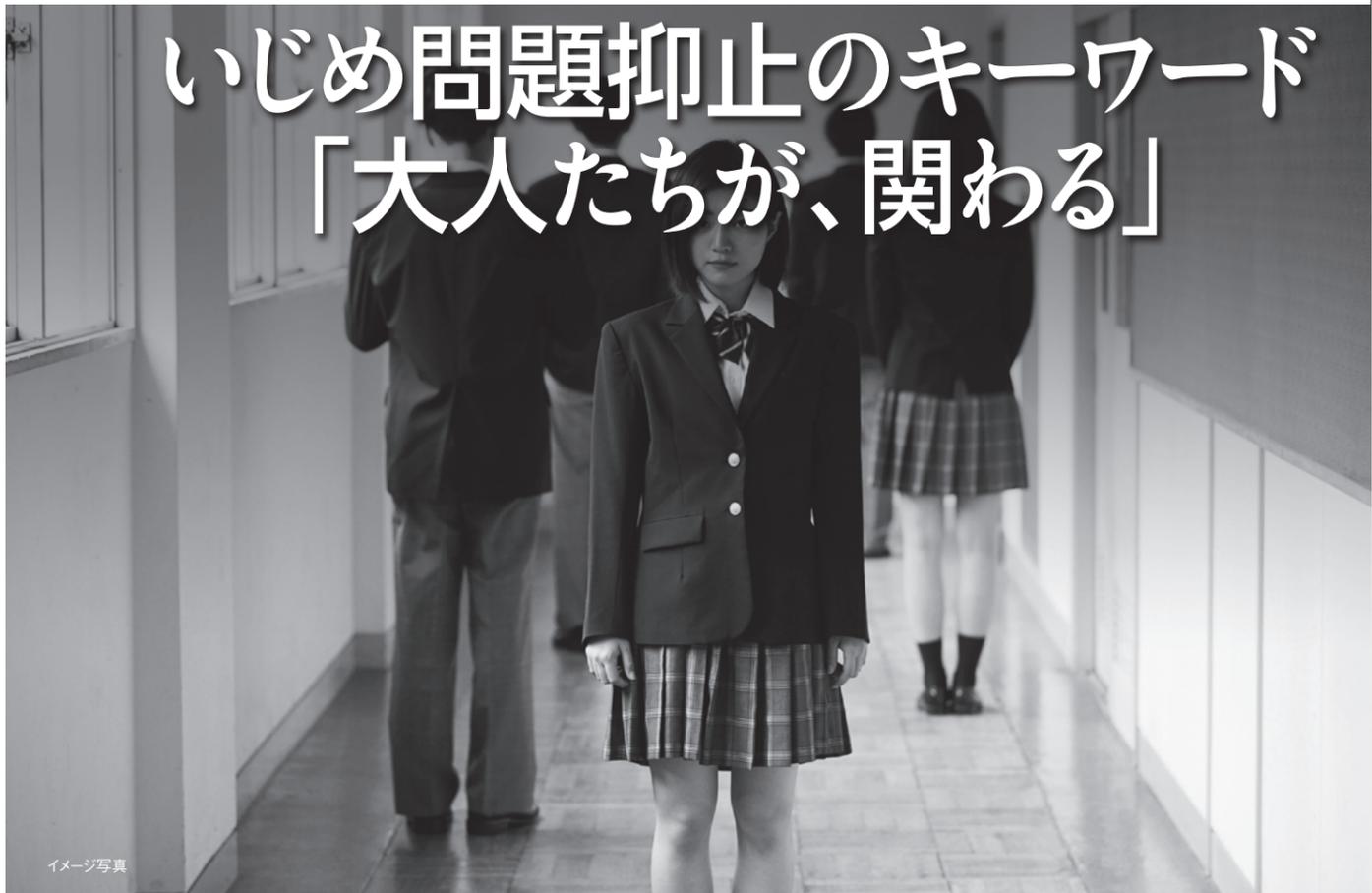


令和の子どもたちへ、大人たちへ

いじめ問題抑止のキーワード 「大人たちが、関わる」



イメージ写真

いじめの証拠収集等を行い、解決に向けてサポートする活動を行っている
阿部泰尚さん（特定非営利活動法人ユース・ガーディアン代表理事）。
 通称「いじめ探偵」としてたびたびメディアに登場していますので、ご存じの方も多いかもかもしれません。
 「いじめは大人の問題」と言い切る阿部さんに、
 私たち大人はどう関わっていったらいいのか、お話を伺いました。

「恐ろしい 「いじめ」の実態

—阿部さんの本業は探偵業ですが、いじめ問題に関わるようになったのは、どのような経緯があったのでしょうか。

元々は普通の探偵業、例えば、浮気調査ですとか、盗聴器の探索などをしていました。

あるとき、女子中学生の父親から「娘がいじめを受けているようなので、証拠を集めてほしい」という依頼が来たのです。我々は学校の中には入れませんが、初めてのことでお断りしたのですが、何度もいらつしやうて、「どうしてもやって欲しい」と懇願されましたので、お引き受けしました。

—どんな案件だったのですか。

その中学生は、同級生に万引きを強要されたり、暴力をふるわれるなどのいじめを受けていました。万引きが発覚すると、学校からは処分を受け、周りの同級生たちも彼女と距離を置くようになりました。一方、いじめは繰り返して行われていましたので、私はまず、いじめの証拠を集め

ることにしました。

ICレコーダーを改良して、彼女の学生カバンの底に忍ばせました。でも、録音を聞いてもただ殴られている音がするだけ。そこで、暴行を受けているときの状況がわかるように相手の名前を叫んだり、「痛い」などの声を残すように彼女と練習しました。「〇〇君、痛いよ」という感じですね。

—学校に持ち込みました。

「いじめっ子は 「優等生」

—学校の対応はどうでしたか。

あまり芳しくなかったですね。でも対応をしなければ、警察に話を持っていくと言いましたら、その子の名譽回復と処分の取り消し、そしていじめをした生徒への指導を約束したようです。

名譽回復といっても、実際に万引きをしているわけですから、本人も反省しなくてはならないのですが、いじめをしていたグループからは離れることができました。

ただ、いじめをした生徒は、一般

的な「悪い子」というわけではなく、むしろ優等生で、先生受けも良い子でした。そのあたりに、私は怖さを感じました。もう15年も前のことになります。

「ついたあだ名は 「原発」

—見良い子にみえる子がいじめをしているとは、聞いたことがあります。これまで一番印象深かったのはどんなものでしたか。

それは今も対応中の案件なのですが、東日本大震災で福島県から、自主避難をした女子中学生に対するいじめです。

転校先でつけられたあだ名は「原発」。「補助金をたくさんもらったんだろ」と揶揄され、彼女がさわったものにはさわらない。あけくの果てには、暴力を受けることさえありました。

補助金の話などは、大人が言っているのを聞いたのだと思います。大人の考え方が子どもたちに伝わってしまっているのですね。

ついに、その女子中学生は自殺を図りました。幸いにも、命はとりと

めましたが、最初に会った時は、新しい人を介さなければ、一言もしゃべれないほどでした。

—その問題はメディアにも取り上げられていましたが、学校側の対応はどうでしたか。

学校側は、彼女が不登校になっても特に対処をしていませんでした。平成25（2013）年、日本では「いじめ防止対策推進法」ができ、いじめに対する基本方針が決まりました。

それに照らせば、この案件は重大事態に該当します。第三者調査委員会を設置しなくてはなりません。しかしながら、学校も市や県の教育委員会もそうはしませんでした。

そこで私は、情報開示請求をしたり、文部科学省へ相談に行ったりと考えられることを全てしました。後にわかったのですが、学校側は女子中学生が自殺を図ったのはいじめではなく、家庭内暴力が原因であると虚偽の報告をしていました。



阿部 泰尚（あべ・ひろたか）
 1977年、東京都生まれ、東海大学卒業。2004年、日本で初めて探偵として子どもの「いじめ調査」を行う。著書に「いじめと探偵」（幻冬舎新書）。日本メンタルヘルス協会公認カウンセラー、T.I.U.探偵養成学校の主任講師・校長を務める。

—東日本大震災から8年が経ち、福島県も復興へと歩んでいます。その中学生はその後どうなりましたか。

今は、ようやく解決への糸口が見つかったところです。でも、どんな形であれ、被害者の子の心の傷は簡単には癒されません。いじめられた挙句、社会の大人たちにも裏切られたわけですから、途方もないダメージ

令和の子どもたちへ、大人たちへ

いじめ問題抑止のキーワード 「大人たちが、関わる」



イメージ写真

を受けています。この先もフラッシュバックに苦しむでしょうし、人間不信から抜け出せないかもしれません。そういう子たちを少しでも救えればと思つて、探偵業とは別にユース・ガーディアンを設立したのです。今は同様の活動をされている、他のNPO法人などと連携して活動を行っています。

——今と昔では、いじめの質は変わりましたか。

これまで、約6,000件の相談対応をしていますが、最近はいじめの「低学年化」と「狂暴化」が顕著になっていて感じます。小学1年生が集団で暴力を振るい、けがをさせてしまう事例もありました。まさかと思うでしょうが、これが特別な事

だけでも効果がありますよ。親には話せないことでも、いつも声をかけてくれる近所のおじさん、おばさんには話せるということもあるのです。私が関わった学校の中には、地域の方にオープンな校風で、近所のお年寄りが学校に入りし、子どもたちと話をできる場所もありました。その校長室は、いつも子どもたちであふれています。いじめがないわけではありませんが、いじめた側と

いじめ自殺防止のための共同宣言

学校に行きたくない、行きたくてもいじめがひどい、何があったのか、何が起きたのか？もし、話さずにつらかったら、話せる時まで私たちは待っている。
命はリセットできない。
想像してほしい。君がいなくなつたら、君の大好きな人たちがどれだけ悲しむのか。
君に「つらい思いをさせた人たちは反省するのかわ？君を償うのか？」
逃げる場所はない。
もしも、君が逃げるなら、この宣言に賛同したすべての団体とすべての人たちが、君の逃げ場を探す。
もしも、君が戦うのなら、この宣言に賛同したすべての団体とすべての人たちが、君を徹底的にサポートする。
私たちは、君が声をあげてくれないと、君を見つけて出すことができない。

だから教えてほしい。
私たちは君の話を聴く。
君の元へ駆けつけて、直接助けられることもできる。
だから、ちょっとだけ勇気を出して連絡してほしい。
一人では大変なら、私たちに連絡してほしい。
必ず、その勇気に応えるサポートをする。

いじめの相談はこちらから！
ユース・ガーディアン
メール相談
http://ijime-sos.com/contact/

連携するNPO法人等と毎年発行している「共同宣言」ポスター。
ご希望の方は特定非営利活動法人ユース・ガーディアンまでご連絡ください。

特定非営利活動法人ユース・ガーディアン <http://ijime-sos.com/>

例ではありません。
いじめは、どの学校でも当たり前

「いじめ蔓延の裏側にある 大人の劣化」と「組織の問題」

——いじめの原因は、どこにあると思いますか。

私の経験からいえば、大人の質が劣化しているせいだと思います。

あとは、組織の問題がありますね。学校や教育委員会が不誠実な対応を繰り返したのも、組織を守ろうとするあまりの異常な行動といえます。

被害者の声に耳をふさぎ、その姿を見ようとしません。外部からの監視や働きかけがないと、自浄するのは難しいでしょう。

それから、新しいメディア、スマホやSNSの影響もあります。身勝手な書き込みが多く、言葉も選ばない。そればかりを見て育つたら、人を思いやる子が育つわけがありません。

先ほどお話しした福島の事例では、警察の調べで加害者生徒の親がいじめ被害を受けた女子中学生をネットで誹謗していたこともわかりました。もはやいじめというより、大人の犯罪と言つてもいいですよ。

いじめられた側の保護者同士が意見を交わして、解決方法を探ったりしていました。

肝心なのは、先生や地域の大人たちが見守っていて、いざとなれば自分たちのために動いてくれることを、子どもたちが知ることが重要なのです。

——いじめを隠すことが、もっともまずい対応ということですね。

はい。いじめ問題をオープンにすることで、学校側の負担も減ると思っています。

先生の中には、この問題に熱心に取り組んでいる方も多く、私たちの

のように起きていることだと思つて対応すべきです。

——ユース・ガーディアンのホームページには、「子どもは変わっていない。大人が変わつたんだ」というメッセージがありますね。

自分が解決にあたらうとは思わず、誰かに任せようという考えの大人も多くなっていますね。

例えば、電話相談を受けている私どものスタッフに、罵声をあびせる保護者もいます。相談をするという

積極的に「大人が関わる」ことが いじめの抑止につながる

——これまでの経験から、いじめ解決のために必要なことはなんだと思われませんか。

大人たちが積極的に子どもたちに「関わる」ことだと思います。保護者はもちろん、地域の大人たちが関わるのが重要です。

朝、登校する子どもたちに、「お団体とも連携を取っています。ただ、学校が閉鎖的だと、そうした先生方の活動が非効率になりますね。それから、どうも学校はいじめ問題を怖がって避ける傾向があります。小さいうちからいじめについて、子どもたちともっと話をするべきです。自分がいじめられていると気づかない子どもも多く、いじめを受けているか聞いても答えられないということがよくあって、発覚が遅れてしまいます。

もつと、子どもの修正力や理解力を信用した方がいいですね。そうしたことでいじめの早期発見ができ、重篤化を防ぐことができるのです。

やはり大人たちが積極的に関わる。それがいじめ抑止のための最良の策だと思います。

——最後に、今、いじめで悩んでいる子どもたちにメッセージをいただけますか。

私どもの団体には、子ども自身から電話がかかってくることもあります。かなり思い詰めていて、深刻な

姿勢ではないんですね。相手の言うことは全く聞かないで、一方的にまくらしたるのですから、子どものことを理解するのは無理だろうと感じます。

以前、ある学校の校長室で打ち合わせをしていましたら、いじめを受けたという生徒の保護者が「こっちは税金払っているんだから、いじめを解決しろ」と、怒鳴り込んできました。私も校長先生も税金を払っていますし、学校は教師と保護者が協力して子どもたちを育てる場であつて、サービス業ではないのです。

拝金主義というか、お金を払えば、何でもやってもらえると考える大人が多いように感じます。

はよう」と声をかけるだけでもいいと思います。それによって、普段とは違う子どもの様子に気づくなど、いじめの兆候をとらえて早期に解決した事例もあります。

地域の大人のあいさつ運動は、あいさつの習慣づけが目的かもしれませんが、いろいろな大人が周りにいるということ、子どもたちが知る状況もあります。そういうときには、こんな話をしています。

「今の君の苦しみは、必ず解決する方法がある。僕らのところに相談してくれてもいいし、他の方法を考えてもいい。学校を休んだついでいいんだから、死ぬなんて考えてはだめだよ。君にはわからないかもしれないけれど、君が死んだとき悲しむ人が大勢いるんだ。僕たちはずっと君の味方である。だから、まず死なないと約束して欲しい。」

——本日は貴重なお話をありがとうございました。

「いじめ」という問題は、昭和、平成を超え、令和の時代までなくなることはありませんでした。いわば大人たちが放置してしまった負の遺産といえるでしょう。

いじめの抑止に私たちができるところ。私たち大人がしっかりと子どもたちと向き合い、「関わり」を持つことが大切です。